

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
168	独立行政法人酒類総合研究所
<b>題名 (原題/訳)</b>	
未成年者の問題飲酒促進因子についての研究 —未成年者の飲酒問題コホート調査5年後の分析—	
<b>執筆者</b>	
鈴木健二、武田綾、松下幸生	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Jpn. J. Alcohol & Drug Dependence. 2005 40(6):559-71.	
<b>キーワード</b>	
コホート調査、未成年者、問題飲酒	
<b>要 旨</b>	
<p>未成年者の飲酒が将来の健康リスクファクターとなるかどうか、若い世代からのアルコール依存症のリスクとなるのかどうかを明らかにするため、筆者らは1997年から未成年者の飲酒問題のコホート調査を開始し、継続的な飲酒状態の追跡を行っている。調査は開始より10年間、継続する予定である。今回は5年後の分析を報告し、飲酒増大群について飲酒増大因子の抽出を行った。本研究は日本で初めての未成年者飲酒問題のコホート研究による長期追跡調査となる。研究対象は1997年に神奈川県のある自治体の4つの中学校に在籍していた生徒で本人と保護者の双方が調査に同意した802名である。飲酒状態、飲酒頻度、飲酒量、飲酒パートナー、飲酒場所、飲酒による失敗談、喫煙状態などについて質問を行った。問題飲酒のスケールとしては1997-2001年までは飲酒量と飲酒頻度を組み合わせたquantity-frequency scale (QFスケール)を使用し、研究対象の平均年齢が18.8歳となり20歳以上のものが20%を占めてきた2002年からは成人の飲酒問題スケールであるcore-AUDITを使用した。問題飲酒促進因子抽出のために飲酒状態を従属変数、調査開始時点での家族状態、家族の飲酒問題、本人の学校適応状態、社会的意識などを独立変数とした多重ロジスティック解析を行った。調査開始時、対象者は802名で平均年齢は13.5歳であったが、5年後の追跡調査時は557名で平均年齢は18.8歳となった。飲まないと回答したものは53.6%から19.5%に減少し、月1-2回飲む者は4.9%から41.8%と8倍以上に増加した。週に1回以上飲む者も0.6%から15.1%に増加した。飲酒量も少量飲酒は減少し、コップに3杯以上が1.3%から39.7%となった。飲酒パートナーは親・親類から、友達とが多数派となった。失敗経験も「吐く」が1.2%から32.3%、「記憶欠損」が0.2%から11.3%となり、二日酔いの経験者も23.7%存在した。調査開始時にはQFスケールによる問題飲酒者が0.1%であったが、追跡4年後には14.5%と増加、追跡5年後にはAUDITにおいて17.4%に増加していた。調査開始時の本人と親の飲酒状況、社会的・心理的問題が5年後の本人の飲酒状況にどのように影響しているかを調べたところ、「調査時点にすでに飲酒経験があった」(オッズ比22.231)、「友達からの飲酒を断れない態度」(オッズ比1.672)、「親に悩み事を相談しない」(オッズ比1.449)が問題飲酒促進因子として考えられた。</p>	